リバイバルチャーチとはどういうものか?

「聖なる吸引力」のある教会

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
草加神召キリスト教会（リバーサイドチャペル）
主任牧師 天野弘昌師

リバイバルの定義

今日は「開拓伝道〜教会形成に至るまで」の内容についてお話させていただきます。まず、リバイバルの定義から始めましょう。皆さんがリバイバルという言葉を聞いた時、何をイメージしますか。メディアなどで、人がたくさん集まってイエス様を信じたり、癒しを受けたりというものを多く見たりしませんか。私も神学生時代はそう思っていました。ですから、私はそういうイメージを抱きながらリバイバルのために祈っていました。しかし、それだけではないということがかなりたってから分かりました。「誰でもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造りかえられた。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」とある通り、私達一人一人が内側から変えられなければならない、すなわち、生まれ変わるというポイントに気がつきました。「世の中の価値観にどっぷり浸っていた人が、主の愛に、主イエス様の十字架の愛に心打たれ、救われ、造り変えられ、新しい命を与えられる・・」これがある意味では、リバイバルであり、一番の原点なのです。ですから、私という一個人が救われるということは、私が本来あるべき姿に戻された、リバイブしたということです。この生まれ変わった私を通して、リバイバルの輪が広がり、リバイバルの川が流れていきます。ですから、リバイバルという言葉を使うにあたっては、そういう意味合いもあるので、必ずしも沢山の人が一斉に救われること自体がリバイバルだと限定してしまうと、日本の場合は、まだリバイバルしていないと安易に言ってしまいかねません。

キリストの体なる教会

教会が教会として真に成り立つために大切なことをエペソ1章22-23節から見てみましょう。ここでは、「教会はキリストの体」だと書いています。これはとても大事な点です。教会論でこれを見失うなら、教会はアメニティー・チャーチ化、すなわち、コミュニティーセンターのような誰もが居心地の良い場所、人が願い、人が求めるすべての必要を満たそうとする場所になってしまいます。椅子がきちんと並べられ、内装も素敵な会場、そして重々しい講壇は退けられて、教会はますます「ステージ化」していきます。又、すばらしい賛美やオーケストラ、バンドがあって、音楽に饗宴し、人と人とが音楽のリズムや音に興奮して、激しく歌い、同時に人と人との関わりの中で仲良くしたり、ハグをしたりする･･･。確かにこれらも教会の働きの一部だと思います。しかし、それが教会のすべてではありません。最も大切なのは、教会は「キリストの体」であるということです。たとえ、立派な会場やステージがなくても、フルバンドによる賛美などがなくても、「キリストの体」としての教会が存在し得ます。メガチャーチや音楽的技術の高い賛美をするような環境の中から、電気が通っていない、プロジェクターやコンピューターの操作ができない、ピアノもないというような地域に行った人が、そこでは全然賛美できないし、満たされないとしたらどうでしょう。何かがあって崇高な領域まで引き揚げられるということはもちろんありますが、私達が、「教会はキリストの体」であることを忘れ、今まで培われた、又、体験してきたような教会観の中に染まっているならそのような地域に宣教師として行った場合、やっていけなくなるでしょう。単なるカルチャーショックではなく、スピリチャルショックを受け、「満たされない」「どうしたらよいか分からない」ということになりかねません。しかし、中国の地下教会のような所では、楽器も何もない中で、皆が手を叩いて賛美し、神様に祈り、涙を流し、満たされているわけです。その鍵は、聖霊様ご自身の「臨在」です。聖霊様がどのような働きをされながら、教会をキリストの体として建てあげているか、それがこのエペソ1章23節です。「いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」教会はキリストご自身、聖霊様ご自身が満ち溢れている所だということです。楽器がなくても、神様の臨在の中に浸って、満たされることがなければ、どれほど聖書を学んで訓練を受けたとしても、そのような宣教地に行ったら役に立たなくなる可能性もあります。

アフリカ　ナイジェリアのリバイバル

聖なる吸引力のある教会

なぜこのようなことを言っているかといいますと、「教会」という意識が大切だからです。私はかなり大きな教会から開拓伝道者として派遣されましたが、何もないところから始まりました。母教会にあったようなパイプオルガンやピアノはありませんでした。与えられたのは、小さな鍵盤だけ。それで満たされようとしても、無理なのです。それで、どうしたらよいでしょうかと、神様にひれ伏し祈った時、神様は、「それが教会のすべてではない。むしろわたしが臨在する場所にするように。わたしがいつもそこを愛してわたしの目と耳と心とがいつもそこにあり、あなたのささげる祈りをことごとくかなえる場所にしなさい。」と語られました。その時から私が目指したのが、「聖なる吸引力」のある教会でした。その場所に入ったら、もうじっとしていられないような主の臨在、主の油注ぎにあふれ、「あぁ、ここに神様がいらっしゃる。」とひれ伏してしまうような教会です。リバイバルが起こっている世界の諸教会に旅行に行ったとき、神様が豊かに恵んで祝福されている教会にはそれぞれの特徴があることが分かりました。しかし、共通している特徴は、明確な「主の臨在」でした。どうしたらそのような確かな主の臨在が与えられるのかと思いました。そして、考えた末に私が行き着いたのは、「早天祈祷と断食の祈り」でした。みなさんにこれをしてくださいと言っているわけではありません。しかし、そのように示された私は開拓期、これに徹しました。伝道する前に、又、伝道以上にしたのはこれでした。本当に真剣に祈りました。「天の窓を開いて、あなたの聖霊のすばらしい油を注いでください。終わりの時代の後の雨、恵みの雨を降り注いで下さい。ここはこんなに狭くて小さい場所で、楽器もありません。でも、あなたの臨在があるならば、主がここに生きて働いておられる、こここそ教会だと誰もがわかるようにしてください。」と真剣に祈りました。そのように祈っていると、ある方が早天に来始めました。「主に導かれて来ました。『この教会のためにささげなさい。もし、あなたがささげるならば、あなたに30倍、60倍、100倍の祝福を与えよう。』という神様の声を聞いたので、ささげざるを得なくてささげに来ました。」と言って、100万円の束を差し出されたのです。皆さん、これは経済的な祝福だけではありません。主の臨在があふれ始めると、次々と人が来るようになりました。私にとってその始まりは、金魚のよみがえりという体験からでした。金魚が生き返って、小さな男の子が、「あぁ、イエス様生きて働かれるんだ。」と信じて救われました。その男の子は成長して、今は開拓伝道者として働いています。

また教会のある人が、「隣りの人が広い土地を持っているにも拘らず、いやがらせで私達の家に影